

ヨエル書とラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第三十三号

Jeff Pippenger

2026-01-21

第三十三番

日曜法令の時、十四万四千人は預言的に第十一時の働き人たちと出会う。十四万四千人はすでに封印を受けており、そのとき彼らは大群衆に対し、バビロンから出て来て、第七日安息日を擁護して彼らと共に立つよう呼びかける。神の家に対する裁きは日曜法令において終結し、その後、その裁きは異邦人、すなわち大群衆-神のほかの群れへへと移る。黙示録7章はこの両者を示しており、また第五の封印では、暗黒時代の殉教者たちが、自分たちの殉教に対して神がいつ教皇権を裁かれるのか、「いつまでですか」と問いかける。彼らは、教皇権による迫害の第二の殉教者の群れが満ちるまで墓で休むよう告げられ、また白い衣を与えられる。黙示録7章の大群衆は白い衣をまとっている。というのは、彼らは、やがて到来する日曜法令の危機における教皇権による迫害の第二の殉教者の群れを表しているからである。黙示録7章と第五の封印はいずれもこの二つの群れを取り上げており、同様にスミルナとフィラデルフィアの教会もそうである。スミルナは最後の教皇権による流血の殺戮における殉教者たちを表し、フィラデルフィアは十四万四千人を表す。

ペテロはカイサリア・ピリピにおいて第三時におり、「六日」の後、六時間後ではなく、彼は日曜法の境界に至ることになるが、これは第九時である。

六日の後、イエスはペテロとヤコブとその兄弟ヨハネを連れ、彼らだけで高い山に登られた。そして彼らの前で御姿が変容し、御顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。すると、見よ、モーセとエリヤが彼らに現れ、イエスと語っていた。マタイによる福音書 17:1-3

日曜法において、十四万四千は預言的に大群衆と出会う。エリヤは死を味わうことのない十四万四千を表し、モーセは主にあつて死ぬ者たちを表す。彼らは日曜法においてキリストと共に立っており、そこは、キリストが十字架において恵みの御国を確立されたのと同様に、栄光の御国に油注ぎを行われるところである。もしあなたが、第三時から第九時までの六時間に関連してわたしたちが提示している論理に、なおも従っておられるなら、そのとき、きわめて特別な例証を見ることが必要である。

カイサリア・フィリピの第三時は、カイサリア・マリティマにおける第九時のオメガのアルファである。私は、六時間後ではなく六日後にペテロが変容の山にいること、そしてそれがまた、第九時である日曜法において頂点に至る歴史をも象徴していることを指摘している。この六日間は六時間と符合するが、それはカイサリアからカイサリアへのフラクタルとしてのみである。特筆すべきは、六時間という期間の歴史の内部にその歴史のフラクタルがあるというこの現象が、ペンテコステの季節を考慮する際にまさに起こるという点である。キリストの死からペンテコステに至る六時間は、十字架から西暦34年に至る期間のフラクタルであり、その時に聖なる週が完結し、福音が異邦人に及んだ

今や、高慢と嫉妬が光への扉を閉ざした。牧人たちと博士たちがもたらした報告が真実と認められるなら、それは祭司やラビをきわめて不名誉で不利な立場に置き、彼らが自らを神の真理の解釈者であるとする主張を覆すことになるであろう。これらの学識ある教師たちは、自分たちが異教徒と呼ぶ者から教えを受けるほどに身を低くすることはなかった。神が彼らを顧みずに、無学な牧人や割礼なき異邦人に啓示を与えるなどありえない、と彼らは言った。彼らは、ヘロデ王とエルサレム全市を騒がせているその報告に対する自らの軽蔑を示そうと決心した。これらの事柄が事実かどうかを見るために、彼らはベツレヘムに赴こうとさえしなかった。そして彼らは、イエスへの関心を狂信的熱狂にすぎないと人々に見なすように導いた。ここに、祭司とラビによるキリストの拒絶が始まった。この時点から、彼らの高慢と頑なさは、救い主への確固たる憎悪へと成長した。神が異邦人に向けて戸を開いておられた一方で、ユダヤの指導者たちは自分たち自身に対してその戸を閉ざしていた。

聖なる一週の後半に、キリストは十字架につけられた。三年半後、ステパノは石打ちにされ、コルネリオはペテロを呼び寄せた。十字架から三年半後、古代イスラエルに対する恩恵期間は完全に終結した。そのときステパノは天を仰ぎ見て、立っておられるキリストを見たが、これはダニエル書十二章一節における恩恵期間の終結の象徴である。古代イスラエルに対しては門戸が閉ざされ、異邦人に対しては開かれた。

第九時におけるキリストの死から、第九時におけるステパノの死とペテロの召しに至る期間において、コルネリオとステパノは、一千二百六十日の預言的期間が成就したことを証する二人の証人である。第九時の死から第九時の死までが、一千二百六十日の預言的期間であった。死の第九時からペンテコステの日の第九時に至るまでが、五十二日の範囲において、一千二百六十日のフラクタルを指し示す。

ペンテコステ期というフラクタルは、その一千二百六十日の初めに置かれており、その日々の終わりには、ペテロはカイサリアにおいて第三時と第九時の双方に預言的に位置づけられている。二つのカイサリアは、預言的な六時間の期間のアルファとオメガを表している。その二つのカイサリアの預言的な六時間の期間の中で、ペテロは六日間旅をして、変容の山に至る。この山は、日曜法において頂点に達する封印を表しており、そこでは勝利の教会がすべての山々の上に高く掲げられる。その六日は、カイサリアからカイサリアへ至る六時間の期間を表し、その期間内のフラクタルである。これは、まさに同一の聖なる期間の初めにペンテコステ期がフラクタルであったのと同様である。

初めのフラクタルは、五旬節に関連する春の諸祭の成就であった。カイサリア・ピリピから変容の山に至る終わりのフラクタルも、聖なる週と預言的に結び付けられている。変容の山において、御父は語られた。これは、キリストのバプテスマの時になされたのと同様であり、また十字架の直前にもなされるものであった。聖なる週の始まりから十字架に至るまでに、御父は三度、み声をもって語られた。一度はバプテスマにおいて、次に変容の山で、そして迫り来る十字架の陰において語られた。

十字架は、彼の洗礼に始まった1,260日のオメガである。洗礼と十字架は、ダニエル書九章の聖なる週における特定の道標であり、したがって、変容の山をその聖なる週の一部

として位置づける。もし最初と最後が聖なる週の預言における道標を成就するのであれば、中間の道標もまた、預言的必然として同様でなければならない。

バプテスマは第一の天使、変容の山は第二の天使、十字架は第三の天使である。変容の山において、神はモーセとエリヤを残りの者の教会の道標として指し示された。この適用は、ペテロ、ヤコブ、ヨハネという三重の象徴によって結び合わされている。イエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたのは三度であった。第一はヤイロの娘の復活、第二は変容、第三はゲツセマネであった。第一のとき、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、復活した十二歳の乙女を目の当たりにした。

そして、イエスが帰って来られると、群衆は皆、喜んでイエスを迎えた。彼らは皆、彼を待ち望んでいたからである。すると、見よ、ヤイロという名の人 came。彼は会堂司であった。彼はイエスの足もとにひれ伏し、自分の家に来てくださるよう切に願った。彼にはただひとりの娘がいて、年はおよそ十二歳で、死に瀕していたからである。しかし、イエスが出かけられると、群衆は彼に押し迫った。ルカによる福音書 8:40-42。

ヤイロという名は、「照らす者」および「光り輝き、栄光に満ちること」を意味する。ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけが特別にキリストに同行を許された三度の出来事のうち、これは最初であり、ヤイロは、地をその栄光によって照らす第一の御使いを表している。十二歳の乙女は、十四万四千として復活させられる乙女たちを象徴する。キリストは、十二年の長血を患っていた女との関わりした後、その処女である娘のいる家に到着した。

また、十二年のあいだ血の患いをわずらっており、医者たちに全財産を使い果たしたが、どの医者によっても癒されなかったある女が、彼の背後から近づいて、その衣の縁に触れた。すると、直ちに彼女の出血は止まった。ルカ 8:43、44

十二歳の処女が示され、次の節では十二年間長血をわずらっている女が示される。その女は、処女の生涯の全期間にわたって長血をわずらっていた。イエスは、その長血の女を通り過ぎて処女の娘のもとに至ろうとしておられた。その女は、ラオディキアへのメッセージによって表される第一の天使の使命を表象している。キリストは処女をよみがえらせ、命へと立ち上がらせようとしておられ、病める女、すなわちラオディキアの女には、なお短いあいだ神性に触れる機会が残されていた。幼子は最後の世代を象徴し、イエスは終末の処女を起こすために、病弱な女、ラオディキアのそばを通り過ぎておられる。処女がよみがえるとき、その女はいやされているか、さもなくば通り過ぎられている。

第一の天使の特質は畏れであり、畏れには二種類ある。

彼がなお語っておられるうちに、会堂司の家からひとりが来て彼に言った。「あなたの娘は死にました。もう先生を煩わせないでください。」しかし、これを聞いてイエスは彼に答えて言われた。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば彼女は救われる。」ルカ 8:49、50。

それからペテロ、ヤコブ、ヨハネは、復活が起こった部屋に入る。この復活はキリストのバプテスマによって象徴され、第一と第三の天使の権能の賦与を表していた。変容の山は

、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが証人となった第二の機会である。変容の山は第二の天使であり、キリストが同じ三人の弟子たちをゲツセマネへと伴われたとき、それは第三の天使を表していた。第二段階、すなわち変容の山においては、「二重化」がある。というのは、この山の道標が、父が語られた三度のうちの中間に当たるからである。第一はキリストのバプテスマの時であり、それは十二歳の処女の復活と符合する。第二はその山であり、第三は十字架の直前であった。父が語られた三度と、三人の弟子がイエスとともに彼らだけで出向いた三度とは、いずれの系列においても第二の道標が変容の山であるという事実によって結び合わされている。

そして彼がその家に入られると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと、少女の父母のほかは、誰ひとり中に入ることを許さなかった。人々は皆泣き、彼女のために嘆き悲しんでいたが、彼は言われた、「泣いてはならない。彼女は死んだのではない。眠っているのだ。」彼らは彼女が死んでいるのを知っていたので、彼を嘲り笑った。そこで彼は彼らを皆外に出し、少女の手を取り、「少女よ、起きなさい」と呼びかけられた。すると彼女の霊が戻り、ただちに起き上がった。彼は彼女に食物を与えるよう命じた。彼女の両親は驚嘆したが、彼は、なされたことを誰にも語ってはならないと彼らに命じた。ルカによる福音書 8章51-56節。

ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、ラザロと同様に眠りについていた処女の復活の際に、第一の天使を目撃する。彼女が目覚めると、直ちに起き上がり、食物が与えられる。黙示録十一章でエリヤとモーセが復活すると、彼らは直ちに起き上がり、その後、聖霊が量りなく注がれる。これは処女の食物を表している。変容の山での出来事は、カイサリア・ピリポから六日後であった。ただし、ルカの記録においては例外である。

そして、これらの言葉ののち、八日ほどして、彼はペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。彼が祈っておられると、その御顔の様相は変わり、その衣は白く光り輝いた。すると、見よ、二人の人が彼と語っていたが、その二人はモーセとエリヤであった。ルカによる福音書 9:28-30

マタイとマルコはともに「六日の後に」と明確に述べ、ルカは「約八日」と言う。聖書記者は時の数え方に二通りを用い、一つは包括法、もう一つは排除法である。一見すると矛盾のように見えるかもしれないが、ルカが「約」と言っている事実は、彼が包括法に即して語っていることを示している。これに対し、マタイとマルコが「六日の後に」と言うとき、それは八日間の期間の起算日と満了日を数に入れず、その間の完全な日（丸一日）のみを数えていることを示している。この相違によって、同一の期間について二つの数的表示が生じる。すなわち、一方は八であり、他方は六日である。

カイサリア・フィリポから変容の山に至る六日または八日の期間に関する二つの証言によって確立されるのは、キリストが十四万四千人に封印を施す時期において、八という数はノアの箱舟における八つのいのちを、六という数は第六の教会であるフィラデルフィアを象徴し、フィラデルフィアは「第八であり、七のうちに属する」教会となるべく定められている、ということである。この教会は、モーセ、エリヤ、そしてキリストの栄化において第八へと変えられる。山上の栄化はまた、モーセの歴史における山上の栄化によっても予型化されている。

モーセは山に上るにあたり、七十人の長老とヨシュアを伴った。

そのとき、モーセとアロン、ナダブとアビフ、そしてイスラエルの長老七十人が上って行った。彼らはイスラエルの神を見た。その足もとには、サファイアの石を敷き詰められたような造りがあり、その清澄さにおいては天そのものようであった。イスラエルの子らの貴人たちに対して、主は御手を伸ばされなかった。彼らは神を見、食べ、飲んだ。主はモーセに仰せになった、「わたしのもとに、この山に上り、そこにいなさい。わたしはあなたに、石の板と、律法と、わたしが書き記した戒めを与える。それをあなたが教えるためである。」

モーセは立ち、その従者ヨシュアも起った。モーセは神の山に上って行った。彼は長老たちに言った、「我らが再びあなたがたのもとに戻って来るまで、ここにとどまれ。見よ、アロンとフルがあなたがたと共にいる。だれでも何か用件のある者は、彼らのもとに行くがよい。」

モーセは山に登った。すると雲がその山を覆った。主の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間それを覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセを呼ばれた。イスラエルの子らの目には、山の頂における主の栄光の現れは、焼き尽くす火のように見えた。モーセは雲の中に入り、山に登った。モーセは四十日四十夜、山にいた。出エジプト記 24:9-18。

第一の天使のメッセージはヤイロの娘の復活であり、それはキリストの洗礼と符合していた。その後六日を経て、第二の天使である山上の変容が起こり、それは第三の天使である十字架へと導いた。第二の天使として、この山には二重の証しがある。すなわち、山における御父の御声が、三つのうちの第二の系列と結びつくからである。キリストがペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを伴われたのは三度であり、また御父が語られたのも三度である。この双方が、御父の御声の第二の顕現を指し示している。そして、イエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネをお連れになった第二のときこそ、山上の変容であった。この山における第二の道標は、御父の御声と三弟子という二重の証しを備えている。というのも、第二のメッセージは常に「二重化」を指し示すからである。

夕のいけにえと朝のいけにえとの間の六時間の期間は、マタイおよびマルコにおけるカイサリア・ピリピからその山に至るまでの六日により表されており、また、七日目に雲の中へと召し入れられるまでのモーセの六日により表されている。

この線は第二の天使の待機の時に始まる。それは、モーセが七十人の長老に、彼が戻るまで「とどまっていよ」と命じたことに対応する。線の最初の六日間は孤立しているが、なお全体の四十六日間の一部を成している。六日間は、四十日によって表される第三の試練へと導く期間である。四十六日は神殿を象徴し、六日間は、キリストの死からペンテコステまでの六時間、十字架刑から死に至るまでの六時間、カイサリアからカイサリアに至る六時間、そしてペテロが楼上の間から神殿へ至る六時間である。モーセは契約の律法を受け、神殿を建て上げる方法についての指示を受けている。聖書はだれも神を見たことがないと言うが、長老たちは「イスラエルの神を見た」。モーセと長老たちとともに山における神の栄光の顕現は、変容の山における栄化を予表していた。いずれにも六日の期間が含まれている。モーセの線には、第二の天使の待機の時と、神殿を表す全体としての四十

六日が含まれる。彼が律法を受けた四十日は、封印を表している。

ペテロは第三時にカイサリア・フィリピにおり、第九時にはカイサリア・マリティマへ向かう途上にあつた。そして六日から八日後に彼は山にいて、モーセの七十人の長老たちとともにとどまっていたが、そのとき、ダニエル書第十章におけるダニエルと同様に、栄化された主の幻を見た。ダニエルは、ギデオンおよび七十人の長老たちと同様に、主を顔と顔とを合わせて見た。変容の山は、十四万四千人のラオディキアの運動が、十四万四千人のフィラデルフィアの運動へと変えられる場所である。彼らは第八の教会にして第六の教会となる。ゆえに、六日と八日を見るのである。

十字架につけられてからキリストが死に至るまでの六時間、ペンテコステの六時間、カイサリアからカイサリアまでの六時間、変容の山に至るまでの六日、そして四十日に先立つモーセの六日間は、同一線上にある。パニウムであるカイサリア・ピリピと日曜法との間に、十四万四千人が封印される。その封印は分離をもたらす。

ただ私ダニエルだけがその幻を見た。私と共にいた人々はその幻を見なかったが、彼らに大いなる戦慄が臨み、彼らは逃げ去って身を隠した。ダニエル書 10:7。

モーセは、「われらが再びあなたがたのもとに来るまで、われらのためにここにとどまれ」と言って、長老たちから離れた。モーセは待機の時に七十人の長老から離れた。そして七十週は旧契約の民に与えられた猶予期間を表す。第七十週が終わったとき、その第七十週は、キリストが多くの人と契約を確証した聖なる一週であった。そのとき、キリストは旧契約の民から完全に離れた。旧契約の民がその「血の患い」（彼らにとっては、アブラハムの血によって救われているとする信念）を解決し得た期間は終わり、十二歳の処女は奉仕するためによみがえらされた。待機の時が始まると、モーセは契約の律法と、神殿建設のための指示を受けた。

ペテロ、ヤコブ、ヨハネが山にいたとき、神の民が封印されることと、その後に彼らが旗印として掲げられることは、その契約の民を、十四万四千人の神殿として象徴している。次いで、第十一時の働き手たちはその神殿に結び合わされる。

主はこう言われる。裁きを守り、公義を行え。わたしの救いが来るのは近く、わたしの義が現れるのも近いからである。これを行う人は幸いであり、これを堅く保つ人の子も幸いである。すなわち、安息日を汚すことなく守り、どのような悪を行うことからもその手を慎む者。主に連なった異邦人の子は、「主は私をその民から完全に切り離された」と言うてはならない。宦官も、「見よ、私は枯れ木だ」と言うてはならない。主は、わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶことを選び、わたしの契約を堅く守る宦官たちに、こう言われる。わたしは彼らに、わたしの家の中、わたしの城壁の内に、息子や娘にまさる場所と名を与える。断たれることのない永遠の名を彼らに与える。また、主に連なって主に仕え、主の御名を愛してそのしもべとなり、安息日を汚すことなく守り、わたしの契約を堅く守るすべての異邦人の子らを、わたしはわたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを喜ばせる。彼らの全焼のささげ物といけにえは、わたしの祭壇で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからである。

イスラエルの逐われた者たちを集めておられる主なる神は仰せられる。「なお、すでに彼のもとに集められている者たちに加えて、さらに他の者たちを彼のもとに集める。」イザヤ書 56:1-8.

ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、ならびにモーセは、彼らを憎んだ同胞によって追放された『イスラエルの追放された者たち』を象徴している。

主はこう仰せられる。「天はわが御座、地はわが足台である。あなたがたがわたしのために建てる家はどこにあるのか。わが安息の所はどこにあるのか。」

これらすべてはわたしの手が造り、これらすべてはこうしてある、と主は言われる。しかし、わたしが顧みるのはこのような人、すなわち、貧しく悔い砕かれた霊を持ち、わたしの言におののく者である。牛を屠る者は人を殺す者のようであり、子羊を献げる者は犬の首を断つ者のようであり、供え物を献げる者は豚の血を献げる者のようであり、香を焚く者は偶像を祝福する者のようである。まことに、彼らは自分の道を選び、その魂はその忌むべき事どもを喜ぶ。わたしもまた彼らの迷妄を選び、彼らの恐れていることを彼らの上に臨ませる。わたしが呼んだとき誰も答えず、わたしが語ったとき彼らは聞かなかったからである。かえって、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。

主の御言葉におののく者たちよ、主の御言葉を聞け。あなたがたを憎み、わが名のゆえにあなたがたを追い出したあなたがたの兄弟は、「主が栄光を現されるように」と言った。しかし主はあなたがたの喜びのために現れ、彼らは恥をこうむる。イザヤ書 66:1-5

「喜び」という語は、聖書において幾度も、また多様なかたちで見出されるが、「恥」という語も同様である。ヨエル書に基づくペテロのメッセージの文脈においては、恥と喜びは、賢い者と愚かな者、あるいは麦と毒麦の關係に類する並行關係である。ヨエルの文脈では、恥と喜びは、油、すなわち後の雨のメッセージを有する者と、それを有しない者とを表象している。この細部に目を留めてはじめて、「あなたを憎み、わが名のゆえにあなたを追い出したあなたの兄弟たち」という語句のより深い意味に到達しうるのである。その兄弟たちとは、Spalding and Magan の一、二頁において、「ユダのような名目上のアドベンチスト」であり、「彼らはわれわれをカトリックに裏切って引き渡すだろう」、「彼らは安息日のゆえにわれわれを憎み、それを論駁できなかったからである」と記されている者たちである。あなたを憎むその兄弟たちは、論駁不能な地の安息、すなわちモーセの「七たび」に関するメッセージをめぐって、あなたを追放する。ここでの要点は、イザヤがそう呼ぶところの教理上の「論争」をめぐって、あなたが追放されるということであり、その教理上の論争とは後の雨のメッセージである。

ヨエルはそのメッセージを「新しいぶどう酒」と呼び、そのメッセージを持つ者は喜びを持つのである。持たない者は、ヨエルの酔いどれのように目覚め、新しいぶどう酒が自分の口から断たれているのを見出す。その時、預言的に「恥をこうむる」のである。油を持つ一群は喜びを持ち、油のない一群は恥をこうむる。油はまた新しいぶどう酒であり、喜びに結びついている。ゆえにイザヤは「主の言葉を聞け」と言うのである。一方の一群は聞くことを選び、他方はラッパの音に耳を傾けない。イザヤは「その御言葉におののく

者たちよ」と述べる時、聞く者たちの一群を特定している。主は、9/11に到来したそのメッセージのゆえに追放された者たちを集め、そして日曜法の時には、枯れた木として表象されているイザヤの言う宦官たちを集められる。もし彼らが契約を固く握るなら、彼らはもはや神の聖なる山から切り離されることはない。

宦官や枯れ木は死を象徴する。宦官は子孫を残すことができず、枯れ木には生命がない。約束とは、もしその異邦人たち、すなわち第十一時の労働者たちが、安息日により象徴される契約を受け入れるなら、彼らに息子と娘が与えられる、ということである。まず主はイスラエルの追いやられた者たちを集め、それらの追いやられた者を旗印として掲げ、そしてご自身のほかの羊の群れをも集める。この第一と第二の集めは、聖霊が振りかけておられる9/11から日曜法に至る期間と、また日曜法からミカエルが立ち上がり、後の雨が限りなく注ぎ出されるに至る期間を表している。いずれの期間においても、後の雨はメッセージであり、それを有する者には喜びを、欠く者には恥をもたらす。

マタイの福音書は三本の線に分けられており、それぞれが黙示録十四章の三天使のうち一人を表している。さらに、三本の各線はまた、三天使のフラクタルを内包している。第十一章から第二十二章に至る第二の線は中心線である。というのも、それは第二の天使であり、第一の天使と第三の天使のあいだに位置しているからである。創世記および黙示録の契約の章々の文脈において十一章から二十二章を考えると、マタイの福音書はそれ自体が中心線となる。

契約の十二章の中心はマタイにあり、マタイにおける三本の線のうち中央の線も、同じ十二章の中に見いだされる。その十二章の中心は、十四万四千人への印の押捺である。その中心点は三節によって表されており、それらは、創世記および黙示録における契約の十二章の中心の三節と符合する。

ペテロは中心の中心の中心点であり、彼は最初にして最後のキリスト者の花嫁を表している。それがアルファとオメガの署名である。パルモニはまた、英語におけるペテロの名の謎を設計した際、ペテロの改名にも御自身の署名を記した。イエスはペテロにヘブライ語で語られ、その会話はギリシア語で記録され、その後英語に訳された。英語において、パルモニは英語アルファベットの第16文字に続けて第5文字、次いで第20文字、次いで第5文字、次いで第18文字を用いてペテロを命名した。パルモニとしてその名を創造したとき、彼はその名がヘブライ語からギリシア語、さらに英語へと移されることを十分に承知していたのである。また、その英語名が、これら五つの文字を乗算するという謎によって、十四万四千という数に到達することを可能にするようにも設計された。さらに、初めにして終わりでもあるパルモニは、ペテロという名がマタイ16章18節に記されるように、その名を構成する五つの英文字のうち最初と最後を、それぞれ英語アルファベットの第16文字と第18文字と定めた。

ペテロについて以上のことを述べたうえでなお、「黄金比」に触れる必要がある。黄金比は、その比が1.618であるがゆえに、マタイ16章18節によって表される。黄金比は自然のフラクタルと関連づけられており、パルモニがマタイ16章18節においてペテロを位置づける時、パルモニは、イザヤ書22章22節でエリヤキムの肩に置かれる預言的な鍵、ならびに同箇所でもペテロと教会に与えられる預言的諸鍵に、預言的フラクタルが含まれて

いることを指し示している。

カイサリア・フィリピにおける第三時から、カイサリア・マリティマにおける第九時に至るまでの事柄は、キリストが十字架につけられた第三時から、コルネリウスがペテロを呼び寄せるために人を遣わした第九時に至るまでのフラクタルを表している。十字架刑の第三時から、ペンテコステにおいて第九時に神殿にいたペテロに至るまでのペンテコステの季節は、十字架からコルネリウスに至る1,260日のフラクタルである。父が語られた三度は三人の天使のフラクタルであり、同様に、イエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを伴われた三度もそうである。ペテロが十四万四千を例証する聖句に符号化されている預言的情報は、これまでに存在したいかなる真理にも比肩するほど深遠であるが、それでもなお、私たちはいまだダニエル書十一章においてペテロをパニウムに位置づけていない。

次回の記事でこの研究を続けます。

イエス・キリストの使徒ペテロから、ポントス、ガラテヤ、カッパドキア、アジア、ビテニアに散在する寄留者たちへ父なる神の予知によって選ばれ、御霊の聖別によって、服従とイエス・キリストの血の注ぎかけを受けることに至る者たちへ。恵みと平安があなたがたに増し加えられるように。わたしたちの主イエス・キリストの神にして父なる方は、ほむべきかな。その豊かな憐れみにより、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、私たちをふたたび生まれさせ、生ける望みへ、また、朽ちず、汚れず、しぼむことのない嗣業へと至らせてくださった。その嗣業は、あなたがたのために天に蓄えられている。あなたがたは、終わりの時に現されるように備えられている救いに至るまで、信仰によって神の力により守られている。

このことにおいてあなたがたは大いに喜んでいられる。いましばらくの間、必要があっても、さまざまな試練によって悲しみに遭っているとしても、あなたがたの信仰の試練は、火で試されるがついには滅びる金にまさる、はるかに尊いものであり、イエス・キリストの現れるときに、賛美と誉れと栄光に至るものとして見いだされるためである。あなたがたは、その方を見たことはないが愛し、今も見てはいないが、なお信じて、言い尽くしがたく栄光に満ちた喜びにあふれている。すなわち、あなたがたは、信仰の結末である魂の救いを受けているのである。

この救いについては、あなたがたに臨むべき恵みについて預言した預言者たちが、熱心に尋ね求め、丹念に探り求めた。彼らのうちにあるキリストの霊が、キリストの苦難とその後現れるべき栄光とを前もって証ししたとき、それがいつ、いかなる時を指し示すのかを探り求めたのである。彼らには、彼ら自身のためではなく、私たちのためにこれらの事柄に仕えていたのだということが啓示された。そして、その事柄は今、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた者たちによって、あなたがたに告げ知らされている。これらの事柄は、天使たちもつぶさに究め見たいと願っている。

それゆえ、あなたがたは思いの腰に帯を締め、慎み深くして、イエス・キリストの顕現のときにあなたがたにもたらされる恵みに、終わりに至るまで望みを置きなさい。従順な子らとして、無知であった以前の欲望に従って自分を形づくることのないようにしなさい。むしろ、あなたがたを召してくださった方が聖なる方であるように、あ

あなたがたもあらゆる行いにおいて聖でありなさい。「わたしは聖であるから、あなたがたも聖であれ」と書かれているからである。

また、人を偏り見ることなく、各人の業に応じてさばかれる父を呼び求めるのなら、この地での寄留の時を、畏れのうちに過ぎなさい。あなたがたが、父祖伝来のむなしい生活から贖い出されたのは、金や銀のような朽ちるものによってではなく、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの尊い血によってである。この方は、世の基が据えられる前からあらかじめ定められていたが、この終わりの時に、あなたがたのために現れ出た。あなたがたは、彼によって、彼を死者の中からよみがえらせ、栄光をお与えになった神を信じている。それは、あなたがたの信仰と望みが神にあるためである。あなたがたは、御霊によって真理に従い、偽りのない兄弟愛に至るために魂を清めたのだから、清い心から、互いに切に愛し合いなさい。あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち生きていて永遠に存続する神の言葉によってである。すべての肉は草のようであり、人のすべての栄華は草の花のようである。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に存続する。そして、これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられた言葉である。ペテロの第一の手紙 1:1-25